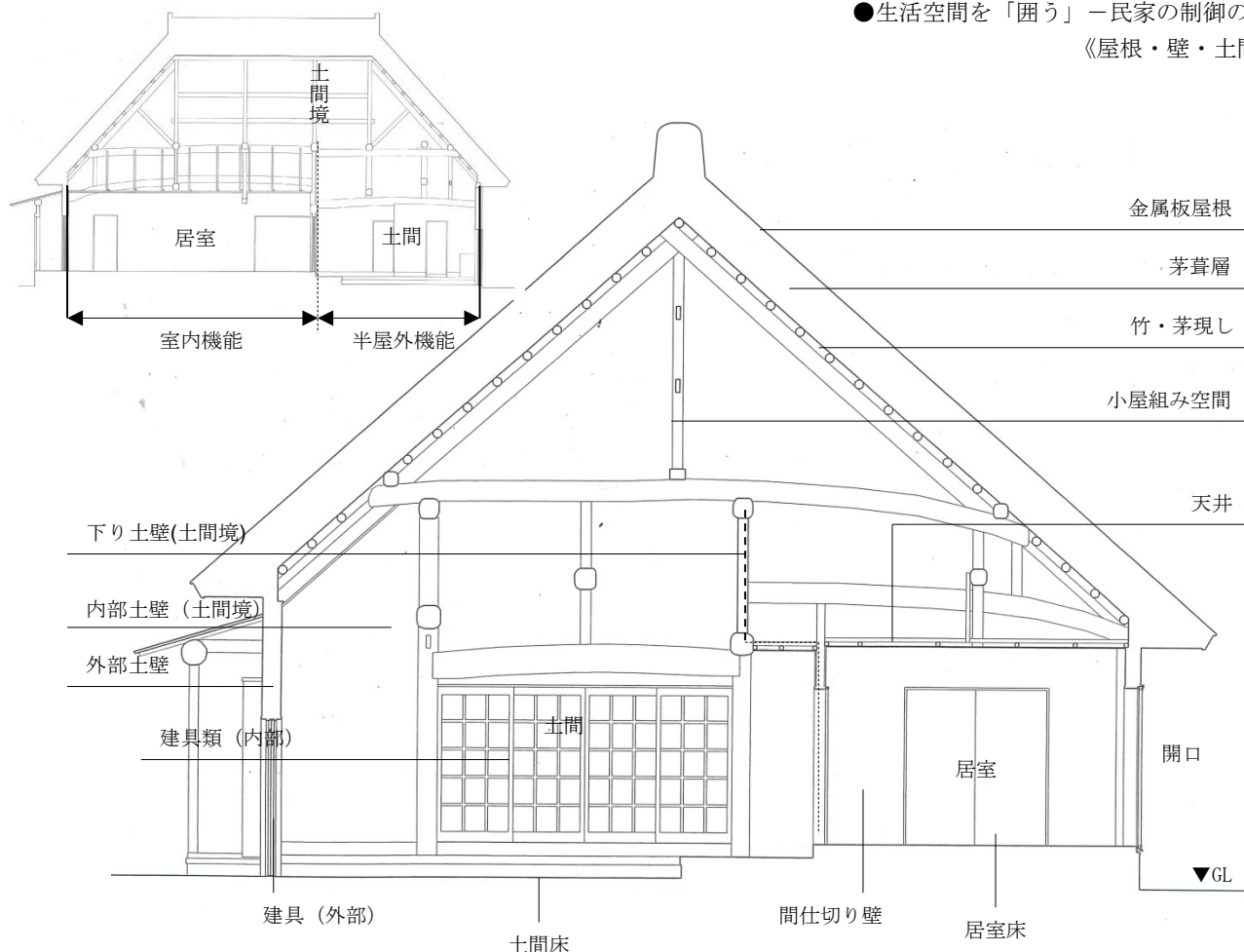


●生活空間を「囲う」—民家の制御の層
《屋根・壁・土間》



房総地方の典型的な広間型四間取の古民家を参照しつつ、伝統民家特有の部位である屋根、壁、床（土間）について記述する

●茅葺屋根

現存する古民家の大半の茅葺屋根は金属屋根で覆われている。通常茅葺の厚さは40～50cmあり、土間部などは天井がなく茅現しが一般的である。劣化状態はススキや稲藁の材種の違いはあるものの、煤に覆われ相当の年月(30～40年か)を経、改修後さらに25年後においても安定した状態で保たれている事例もある。土間の上部が開放され、外気や室内空気と直に接していることが、有効に働いているものと推察できる。茅の優れた断熱性能は、特に夏季に発揮され午前中の室温が窓を閉鎖した状態で外気温より2～3度低くなる。同時に立地環境上、都市部に比べ2～3度気温が低い点や土間による冷却効果も関係し、夏季の茅葺き民家の熱環境は優れて快適であるといえる。なお土蔵についての室温調査は、数例報告されているが、茅葺民家は条件設定により影響があり、現時点では計測データは未確認である。

【指針】改修工事は茅の劣化はあるが現しを優先する。茅を残し室内側から面材等で隠蔽する場合、通風のための風洞を確保し、現時点では密閉を避けるのが妥当と判断する。

●土壁

土壁は通常、土間と座敷の境界や垂壁、外部に面する壁面などに多用され、多くは経年劣化、損傷もある。

土壁の経年劣化は、外部と内部、高部と低部、日当たりや雨がかり、湿度や土壌の性質など様々な要因に影響され、破損、脱落や微生物、塵埃による汚れなどに違いが生じる。新規漆喰壁の汚れ防止に対してハイドロテクト等による現場実験を3例試みたが、自然系素材では確かな効果は得られていない。

壁の改修にあたり現況に脱落がなく小舞が露出していない場合、現場で壁土の劣化度、乾燥状態を下塗り実験により行い、結果を確認した上で上塗り補修に移る。なお上塗り前に旧土壁の表面を被膜する合成塗料もある点を補記する。

壁土の脱落、小舞に及ぶ損壊がある場合、①小舞下地を含め、土壁を除去し、再度伝統工法で復する。②壁土、小舞を除去し断熱材施工の上、ラスボード(内)や合板または木摺り下地による現代工法で改修する。

【指針】土壁は基本的に土物系または湿式工法で改修する。

●土間

現況では土間はタタキ（三和土）のままでなく、タイル張りや板張りなどに改修されているものもある。しかし断熱性や室温の確保等に対しては必ずしも充分ではないことが多い。一方、土間部は概して閉鎖的であり日射が限られることが多く、年間を通じて室内温度を下げる方に働くと考えられる。

伝統民家の特質のひとつである土間の扱いは改修上の重要な要素であり、改修計画は慎重さを期すべきである。

ここでの特質とは、①広い土間の利用法、②梁組が現れた吹き抜け空間、③土間による熱環境との関わりを指す。工事での仕様は施工編に記載するが、ここでは「土間空間を保全」することを基本にすえる。

【指針】伝統工法で三和土ないしは土もの系で再生する。又は土間打ち工事により対応する。

なお、上記の特質①は必要な床面積とコストコントロール②は空間的・芸術的資本の占有、③は夏季の熱環境の制御と区画方法に関係するので、別項の記述も参照し処する。